短 報

慢性リンパ球性白血病浸潤を伴った
子宮頸部扁平上皮癌の1例川崎医科大学附属病院 病院病理部¹⁾, 同 病理学教室²⁾, 同 産婦人科学教室³⁾鐵原 拓雄¹⁾ 有光 佳苗¹⁾ 坂元 和宏²⁾ 広川 満良²⁾藤原 恵一³⁾

I. はじめに

子宮頸部擦過標本にて慢性リンパ球性白血病細胞の浸潤と扁平上皮癌細胞の両方がみられたきわめてまれな1例を経験したので報告する。

II. 症 例

53歳, 女性. 8ヵ月前に慢性リンパ球性白血病 (stage 0) と診断されるも無治療であった. 2ヵ月前より不正性器出血が出現し, 当院産婦人科を受診した. 末梢血の白血球数は $20,900/\mu\text{l}$ (好中球 27%, リンパ球 67%), 骨髓検査はリンパ球 78.6% (CD 5 : 70.9%, CD 19 : 86.4%, CD 20 : 83.7%, HLA-DR : 87.8%) であった. 子宮頸癌 (stage II a) の診断で準広汎子宮全摘術が施行された. 開腹時骨盤内リンパ節は小指頭大から母指頭大に腫大していた.

III. 細胞所見

少数の扁平上皮由来の異型細胞が集合性および散在性にみられた. 異型細胞は類円形で核・細胞質比が高く, 細胞質はライトグリーンからオレンジGに好染

写真 1 子宮頸部擦過標本. a : オタマジャクシ型扁平上皮癌細胞がみられる, b : 白血病細胞 (a, b : パパニコウ染色, $\times 100$)

Squamous cell carcinoma with involvement of chronic lymphocytic leukemia in cervical smear

Takuo KANAHARA¹⁾, C.T., I.A.C., Kanae ARIMITSU¹⁾, M.T., Kazuhiro SAKAMOTO²⁾, M.D., Mitsuyoshi HIROKAWA²⁾, M.D., F.I.A.C., Keiichi FUJIWARA³⁾, M.D.

¹⁾Department of Pathology, Kawasaki Medical School Hospital

²⁾Department of Pathology, ³⁾Department of Obstetrics and Gynecology, Kawasaki Medical School

論文別刷請求先 ☎ 701-01 倉敷市松島 577 川崎医科大学附属病院 病院病理部 鐵原拓雄

平成9年3月17日受付

平成9年8月8日受理

し, 層状構造があり, 一部オタマジャクシ型細胞もみられた (写真1 a). 核は類円形で, 核クロマチンは粗大顆粒状であった. 背景には8~9 μm 大のリンパ球様細胞が散見された. これらの細胞の核は類円形で, 核クロマチンは細顆粒状から顆粒状を呈し, 小さな核小体が1個みられた (写真1 b).

IV. 病 理 像

子宮頸部に3×7 cm大の境界明瞭な隆起性白色腫瘤がみられた. 組織学的には癌真珠や細胞間橋を有する角化型扁平上皮癌であった. 浸潤の深さは18 mmで, stage II aであった. 扁平上皮癌胞巣の周囲や粘膜上皮細胞層直下には小型リンパ球が密に浸潤し, 慢性リンパ球性白血病細胞の浸潤と考えられた (写真2). 左総腸骨リンパ節には扁平上皮癌の転移を認め, 右総腸骨リンパ節には白血病細胞の浸潤がみられた. 免疫組織化学的検査では白血病細胞はL-26に陽性で, UCHL-1は陰性であった. 表面マーカーの検査

写真2 子宮頸部の組織像. 扁平上皮癌胞巣の周囲に慢性リンパ性白血病細胞の浸潤がみられる (H-E染色×10, ×100)

では, 白血病細胞はCD-5, CD-19, CD-20, HLA-DRに陽性で, IgG, λ 型の monoclonality がみられた.

V. 考 察

婦人科領域の細胞診にて白血病細胞の浸潤がみられた報告はまれで, 急性リンパ性白血病, 急性骨髄性白血病, 急性単球性白血病などの症例が散発的に報告されているにすぎない¹⁻³⁾. われわれが調べた限り, 慢性リンパ球性白血病が子宮頸部スミアに出現した報告例はなく, また扁平上皮癌と合併した症例もみられなかった.

本例の子宮頸部擦過標本に出現したリンパ球様細胞は小型であるが核小体があり, 成熟したリンパ球とは考えにくかった. また濾胞性頸管炎とすれば, リンパ球系の各成熟段階の細胞や形質細胞がみられるはずである⁴⁾が, ほとんどが小型で均一であったため白血病細胞と考えてよいと思う. 血液の混入の可能性もあるが, 組織学的に子宮頸部に白血病の浸潤がみられ, しかも粘膜表面に達していたことから子宮頸部スミアに出現したリンパ球様細胞は白血病細胞と考えられる.

われわれは当初のスクリーニングでは白血病細胞を認識することができず, 組織学的検索後に白血病細胞を確認した. 癌の日常業務では一つの診断にとどまることなく, 併存病変の可能性あることを常に念頭においておくことが大切と思われた. また核小体を有する小型リンパ球がmonotonousに出現している場合は慢性リンパ性白血病細胞の浸潤も鑑別診断として考慮すべきと考えられた.

文 献

- 堀 隆, 平尾喜美子, 藤元里美, 稲本和男, 矢野由佳, 若田 泰・ほか. 寛解期に子宮腔部から白血病細胞を認めた骨髄単球性白血病 (FAB分類: M_1E_0) の1例. 日臨細胞誌 1990; 29: 445~451.
- 上井良夫, 瀧澤 博, 北原武志. 白血化以前の腔スミア細胞診で白血病細胞を認めた急性骨髄性白血病の1例. 癌の臨床 1972; 18: 927~931.
- Spahr, J., Behm, F.G., Schneider, V. Preleukemic granulocytic sarcoma of cervix and vagina Acta Cytol. 1982; 26: 55~60.
- Roberts, T.H., Ng, A.B.P. Chronic lymphocytic cervicitis: cytologic and histopathologic manifestations. Acta Cytol. 1975; 19: 235~243.